
石化魔

加速バナナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

石化魔

【Nコード】

N8335Q

【作者名】

加速バナナ

【あらすじ】

以前べつのHNで書いてた頃の作品を加筆修正して再投稿。触れたものを右に変える能力を持ってしまった少年の、悲しい物語。

1、プロローグ

「いやああっ！ 何よこれ……やめてええっ」

野田久美子は、必死に僕の手から逃れようともがいた。だが僕は彼女の手首を握ったまま、決して離さなかった。

「いやっ、いやああっ」

僕が握っていた彼女の左手首が、パリパリと小さな音を立てて硬くなっていく。皮膚が鈍い灰色になり、質感もザラザラとしたものに变化していった。

「手が……手がああっ！」

変化は、彼女の腕自体を侵食し始めた。野田久美子は自分の身に起こっている現象を目の当たりにして気が狂ったように泣き叫んだ。

「いやああああっ」

「無駄だよ。君はこうなる運命なんだ」

僕は彼女の心地よい悲鳴を聞きながら、無表情で静かに言った。

彼女の腕に起こっている変化は、腕から肩、胸、首、胴体へと、ゆっくりと時間をかけて広がり始めた。その間も、野田久美子は何とかその恐怖から逃れようと必死に抵抗を続けた。

「何なのよ！ 離してよ石動いすのぶつ。あんた、一体何者！？」

僕は答えなかった。ただただ、彼女の悲鳴と恐怖におののく姿に恍惚していた。

やがて、彼女の体に起こっている変化は、腰から足にかけて、首から頬にかけて、体のほぼ9割を覆っていった。

「いや……あつ……！ やだよ……こんなの……！」

野田久美子の悲鳴は、弱々しいものになっていた。

彼女のつま先まで侵食は終わり、やがて野田久美子は抵抗すらしなくなつた。涙を流して虚空を見つめる。その瞳には、まだ助かりたいという願望が見え隠れしていた。

しかし、それももう無意味なことだった。

郊外の倉庫の中。野田久美子は、恐怖に怯える目をしたまま、衣服だけを残して完全に物言わぬ石の像と化した。

2、発現

僕に不思議な能力が備わったのは、一ヶ月前、高校2年の夏のことだった。

学校帰りに河原で道草をくっていた時、それは突如として発現した。

「水切り」という川の水面に向かって石を投げる遊びをしようとしたところ、何気なく拾った石が、手の中で突然弾けたのだ。

「あれ？」と思った。何の力も入れていないのに、たまたま選び取った石がパリンと音を立てて飛び散ったのである。

僕は、それでもそんなこともあるかと、また別の石を拾い上げた。しかしその石もまた同じようにパリンと弾け飛んでしまった。

「おかしいな」

この時はまだ、その程度にしただけ感じていなかった。

けれど、次に拾った石も同じく弾け飛び、その後、拾う石拾う石すべてにその現象が起こった。

「何だ、これ」

僕は啞然とした。なぜ叩いても引っぱってもいない石が次から次へと割れていくのだろうか。

そんな時、ふと毎週読んでいる週刊少年誌の漫画のことを思い出した。主人公をはじめ、様々なキャラクターが、超能力を使ってバトルを展開するという物語だ。

僕はもしかやと思った。僕にも超能力的なものが身についたのではないかと。

ために、近くにあった直径1メートルほどの岩に手を触れてみた。するとどうだろう。僕の腹あたりまであった巨大な岩がピシピシと音を立てて真つ二つに割れたのだ。

ビンゴだ。僕は確信した。僕は超能力を持った。

「触れたもの全てを破壊する能力」

立派な超能力が手に入ったと自分の手を見つめて喜んだ。
でもその見解は違っていた。僕の力は、触れたもの全てを破壊する能力なんかではなかった。

それがわかったのは、帰宅して自分の部屋の机についた時だった。もう一度、自分の能力を確かめてみようと思い、試しにシャープペンシルを手を取った。少し意識を集中して、「壊れる」と念じてみる。

だが、結果は超意外なものとなった。シャープペンシルは崩壊することなく、ピシリピシリとかすかな音をたて、なんと石のような材質に変わっていったのだ。

これには驚いた。僕はてっきりこれがバキバキに壊れるものだと思っていたからだ。

完全に石のようになったシャープペンシルを眺め、どうなるかと思いい床に落としてみた。シャープペンシルはパリンと音を立て、粉々に砕け散った。それはまるで、今しがた見てきた河原の石のように、断面もすべすべとした質感となって割れていた。

さらに僕は別のものに触れてみた。手近にあった辞書を持ち、先ほどと同じように意識を集中させた。案の定、本はまたピシピシと音を立て、重量をも変化させ石のようになった。

ここでようやく僕は把握した。僕に身についた力は、手で触れたものを壊す能力ではない。「触れたものを自在に“石”に変える能力」だった。

見当違いだったが、これはこれで素直に嬉しく思った。なんとって僕は超能力者になったのだから。

おそらく、河原で手に取った石が弾けとんだのは、それ自体がすでに石だったからだろう。だから石以外のものなら何でも石化させることができる。そう理解した。

それからというもの、僕は自分の能力を色んなもので実験してみた。カパンから財布から、椅子といった大きめのものに至るまで、

様々な材質のものを石に変えて遊んだ。

自分が触ったものが別の物質に変換されていく。この様をみるのが、こんなに楽しいことだとは思わなかった。僕は次々と石化を試し、後、石化遊びの対象が生き物になるまで、そう時間はかからなかった。

最初に庭に生えていた小さな植木に手を触れてみた。果たして生きたものでも石化するのだろうか。

答えはYESだった。植木はパシパシと微かな音を奏で、立派な石のオブジェとなった。

これは凄い。ならば今度は、植物ではなく、動物で試してみたいくなった。

部屋の近くでミンミンとうるさく鳴くセミがいたので、そいつにそっと近づき、手で捕まえた。セミはギャアギャアと胸の発音器官を鳴らして羽をばたつかせ、渾身の力で逃げ出そうと抵抗した。だが僕が指先に意識を集中した途端、そいつは一つの石の標本と化した。

思わず「やった」と声が出た。僕は命あるものさえ石に変える能力を身につけたのだ。

まるで神の力を手に入れたかのような高揚した気分だった。これはきつと神様が僕に与えた究極の遊び道具なのだろう。そう思ってみたりした。

……いや、ぶっちゃけ、僕が神なのだ。

神の手の力は止まらなかった。近所の野良猫を捕まえ、誰もいない公園まで抱いていき物陰に隠れてその猫の尻尾を掴んだ。そして石化の念を手の平に集めた。猫の尻尾がパリンと音を立て、石となった。猫は、自分に何が起きたのかといった仰天した顔でギニャア！ と鳴いた。しかし石化を止めるつもりはなかった。猫が石像になるまで1分とかからなかった。奴は最後までもがきながら、体毛の一本一本までつややかな石となって活動を止めた。

僕は、無意識のうちに白い歯を覗かせて笑っていた。

3、僕だけの秘密

同じクラスの野田久美子は、同級生の中でも飛びぬけた可愛さを持っていた。おそらく女子の中では、学年トップ3に入るくらいレベルではないだろうか。しかも容姿だけじゃなく成績もなかなかの優秀ぶりだった。ちよくちよく学年10位以内に顔をのぞかせていた。先生からの信頼も厚く、友達も多く明るい性格で、誰からも慕われるような女子だった。

友達としゃべっている様子をよく見ることがあったが、常に彼女の周りには眩しいオーラが輝いて見えるように感じられた。

もちろん男子にも絶大な人気を誇っていた。いつもクラスの男子は彼女のことを話題にしていたし、何人かは告白して玉砕していた。いわゆる修学旅行の就寝時間に「お前クラスの女子で誰がいいと思う?」「やっぱり野田だろう」という話で花を咲かせることのできる存在として有名だったのだ。

僕もその話題づくりの一員だった。何度、友達との間で彼女の名前を出しただろうか。野田久美子はクラス中の憧れの的だった。

だから僕は、彼女を手に入れたくなかった。

石化の能力を身につけてから、僕の胸の内にはそれまでにはなかった大きな自信がメラメラと築き上げられていた。この力があるだけで何でもできるような気がしていた。それは知らず知らずのうちに成績にも反映され、友達からも「お前最近ちよつと変わったよな」と言われるほどに成長していた。

男子の何人かはもう、野田に告白し玉砕をくらっていた状況だったから、今の自信も相まって現在のこの僕なら彼女に躊躇なく声をかけられるだろうと思った。

その日、僕は野田久美子に近づき声をかけることにした。

ただ一つ注意しなくてはいけないのが、声をかける瞬間を誰にも見られないということだった。

なぜなら、僕は彼女に対し興味は持っていても、他の男子のように恋心などまでは抱いていなかったからだ。

あつたのは強い独占欲だけだった。つまりはこういうことだ。

「彼女を石化させて自分だけのオブジェにしたい」

僕は、彼女の帰り支度が済むのをこつそり横目で見ながら待って、席を立った。

今宮が下足室を出ようとした僕に声をかけてきた。

「あれ。今日お前部活は？ 確か美術部は水曜日あつたよな？」

僕は、「ああ、ちよつと風邪気味でしんどいから先に帰るんだ」と言い訳を軽く即座に考え彼に手を振り下足室を出た。

もつ少して野田久美子を見失うところだった。

僕は、校門を出た彼女を、30メートルほどの距離をおいて後をつけた。野田久美子が門を左に曲がり僕も同じように左へ曲がる。

本当は、右へ曲がる僕の帰路とは反対の方角だったが、幸い、そこは知り合いからは誰にも見られていなかった。

10分ほど歩くと、彼女は人気のない閑静な住宅街へ入っていった。そろそろ彼女の家が見えてくる頃だ。

今がチャンスだ。

僕は、意を決して野田久美子に声をかけた。

「あ、野田さん！」

さりげなく、たつた今気付いたようにニユアンスを選んだ。彼女は振り返って僕の存在に気付くと「あれ、石動？」と首を傾げた。

「ちよつと話があるんだけど、いいかな」

「え？ 話？ うん、いいけど、珍しいね、石動が話しかけてくるなんて」

野田久美子は屈託のない笑顔で了承してくれた。

僕は怪しまれないよう、住宅街を外れた倉庫に彼女を連れて行き、そして彼女を石像に変えた。

べつに特出して歪んだ成育環境があつたわけではなかった。僕の

家庭は至って普通のものだった。父も母も妹も、皆仲はよかつたし、家庭内暴力やスパルタ教育があつたわけでもない。もちろん、逆に両親が優しすぎてお坊ちゃんに育てられたという記憶もない。極めてありふれた家族だった。

だから、僕もこの能力を持つまで、普通に学校に通う、普通の生徒として生きてきた。

でも、人は、変わる。

例えば、強大な権力を持ったとしたら、その人はたちまちヒトラーのような独裁者となってしまうだろう。例えば、コンプレックスが仮に全て解消されたとすれば、その人は180°。人格を変えるだろう。僕に備わった石化能力は、まさにそれだった。この力は、僕自らをまったくの別人に仕立て上げていた。

翌朝、登校するとクラスはちよつとした騒ぎになっていた。野田久美子が家に帰っておらず、どこにもいなくなつたというのだ。

彼女の家は門限が比較的厳しいらしく、いつも時間までにはきちりと帰っていたようだ。それが、昨日は塾に通う日でもなかつたし、彼女の友人の家に電話をかけてもどこにも来ていないということで、昨夜野田久美子の家はすぐに大騒ぎになつたらしい。学校にも電話がかかつてきた。

僕は今宮からその話を聞いて、一人心中でほくそ笑んでいた。誰にも明かせない僕だけの秘密……野田久美子が僕の手落ちたという事実は、僕を優越感に浸らせた。

僕は野田久美子がどこにいるのかを知っている。今どこで、どんな状態で、虚空を見つめているのかを知っている。彼女の悲痛な表情や声は今でも僕の心の中に残っている。同級生の奴らには絶対に言えない秘密だった。

4、独占欲

野田久美子の搜索願が出されてから3日が経った。警察は一向に彼女を見つけれないでいた。むろん野田久美子の家族や友人も彼女の行きそうな場所を何度も探した。けれど、依然として見つかる気配はなかった。

僕が彼女を保存した倉庫は、案外、ベストな場所だったのかもしれない。

学校から10分ほど歩いた先の、かつて野田久美子自身も生活していた区画整理された人気のない閑静な住宅街。そこは、本当に人々が日夜生活を営んでいるのかと思うくらい静かな所だった。木々が規則正しく整列し、その間をそよ風が音もなくすり抜け耳をなでる。車もめつたに通らない、まるで模型のような町だった。

倉庫は、そんな住宅街を抜けたところにあつた。

区画整理前の遺物として存在している廃神社や林があり、その一角で、茂みに隠れるように倉庫は佇んでいた。トタン屋根のバラック造りの倉庫で、以前はその横の草むらになっているところ、家が建っていたらしい。倉庫はその家の所有車庫だった。今は車庫だけが残り、蔓が巻きついて表面の半分以上が錆びびついている。

そんな場所に、野田久美子は無言で保存されていた。

衣服は全部僕が脱がせて埋めた。現在の彼女は一糸まとわず、綺麗な脚線美を描いた露わな姿を晒している。ただし、石像の状態。僕は彼女のそんな姿を、あぐらをかいて真正面から見ながら考えていた。

警察にここを嗅ぎ付けられる可能性はもうないはずだ。先日、隣の廃神社を搜索している警察の姿を見かけた。だがこの倉庫に近づく気配は無かった。生い茂る木々や草むらに隠れていて、おそらくここら一体は搜索範囲から外されたのだろう。

倉庫はよほど人の近寄らないところらしい。僕の誘いにこのこ

ついて来た彼女も彼女だと、無防備な野田久美子が少しおかしく思えた。

「やはり彼女だけでは寂しすぎる……」

僕は、彼女の今では光を失った見開かれた目を見ながら呟いていた。

僕の独占欲は、野田久美子一人だけじゃもはや物足りなくなっていた。

もっとたくさんのオブジェが欲しい。僕は自分の手の平を見つめた。

「先輩！ 石動先輩！」

デッサンの手が止まっていた僕に気付いた桃谷由紀が、後ろから小声で名前を呼んできた。

「お、おう」

僕はとっさに作業を再開させた。僕の頭の中は、部活のデッサンのことではなく、これからこの能力を使ってどうしようか、ということदैいっぱいだっただ。

「先輩最近おかしいですよ、集中力がなくなってるっていうか……。寝不足なんですかあ？」

可愛らしい声で尋ねてくる桃谷由紀に、僕は「いや、大丈夫」と空返事をした。

桃谷由紀は、僕が所属している美術部の後輩だ。ショートヘアで小柄な、例えるなら仔猫のような生徒だった。

彼女はよく僕になついていた。彼女がこのクラブに入りたての頃からたびたび指導してやったせいもあるだろう。僕には妹がいるが、彼女もまた妹のような存在だった。

「天満先生に気付かれなくてよかったですね。ふふ、あの人やる気ない人には厳しいですから」

桃谷由紀は、別の生徒を指導中の天満先生をキャンバスの間から覗

き見しながら、僕に耳打ちしてきた。

「ああ、そうだな。サンキュー、桃谷」

そう言いかけて、僕の中の邪な心が、突然牙を剥いた。

「なあ、桃谷、ちょっと今日時間あるか？」

「時間……ですか？」

桃谷由紀がキョトンとした顔で聞き返してきた。どうやら僕が頼みごとをすることを彼女は珍しいと思っただけらしい。僕が桃谷由紀に対して頼みごとなんて、そういえば初めてだったかもしれない。

「うん、ちょっと協力してほしいことがあって……」

そう言いかけて、僕は慌ててキャンバスの方に首を戻した。天満先生がちらつとこちらの方を振り返ったからだ。何も言われはしなかったが、どうやら、何かしらの私語をしていたことは気付かれていたようだった。お咎めはなかった。ただジロリと僕らの方を睨んだだけで、すぐまたさっきの生徒への指導を再開させた。

僕は、キャンバス上に木炭を滑らす動作をしながら、頭を動かさず後ろの桃谷由紀に言った。

「部活が終わったら校門のところで待っていてくれ」

彼女は普段から素直な子だった。「わかりました」と何の懐疑心も持たず嬉しそうに小声で答えた。

「モデル……ですか!？」

校門へ来たところで、いきなり絵のモデルをしてくれないかと依頼した僕の言葉に、桃谷由紀はクリツとした目をさらに大きくさせた。

「ああ、最近少しスランプみたいでさ。ちょっとデッサンのモデルを探していたんだ。できたら君にやってもらいたくて」

嘘だ。むろん絵のことなんかどうでもよかった。ただ、僕の独占欲を満たしてくれるものなら誰でもいいのだ。

桃谷由紀が普段から僕に親しみ以上の好意を寄せていたことは密かにわかっていた。だから、すぐにOKがもらえらると思った。

しかし彼女は少し戸惑ったように言った。

5、日の光浴びて

「石動先輩の頼みごとなら喜んで受けたいですけど……でも、私でいいんですか？ 私背も小さいし、その……ちよつと幼児体型だし……」

桃谷由紀は少々恥ずかしげに頬を赤らめながら、俯いて黙り込んだ。

僕は仕方なく、彼女をその気にさせるため、適当な理由を並べ倒した。

「僕は君を幼児体系だなんて思ったことはないよ。高校生なんだからちよつとくらい背が低くたって魅力は十分にあるさ。君は可愛いんだからもう少し自信を持った方がいい。それに仮にもモデルとして選ばれたんだ。君は僕のモデルはやっぱり嫌かい？」

すると、桃谷由紀は焦ったように両手を前にかざして左右に振って答えた。

「いえ、嫌じゃないです。ただ、本当に私なんかでいいのかなって……。先輩がいいなら私喜んでモデルやりますよ！」

落ちた。僕は心の中でニヤリとほくそ笑んだ。

「ありがとう。じゃあさっそく、今日頼めるかな？」

「あ、はい。お願いします」

桃谷由紀は、やや大げさにお辞儀をすると「やったー」という表情を見せた。この会話が、彼女にとって僕の能力の犠牲宣告になることなど知りもせず。

「で、どこでやるんですか？ 先輩の家？」

桃谷由紀は、倉庫の方角へ向かって歩く僕の二の腕を両手でハシつと掴みながら訊いてきた。

「いや、実は僕、家じゃどうしても落ち着かなくてね。デッサンはいつも外でって決めているんだ」

「そうなんですか……」

「ああ。それでね、この間、誰にも見つからないようないい場所を見つけたんだよ。今そこへ向かっているとさ」

「へえー。でも、石動先輩のモデルなんて嬉しいな」

桃谷由紀は、無邪気に笑ってそう言った。

「さあ、着いたよ」

僕は倉庫の中へと彼女を案内し、適当な場所に腰掛けるよう促した。

「ずいぶんと薄暗い場所なんですネ……本当に静かで人もいない」

彼女は、倉庫の中を見回しながら不安げな表情でそう呟いた。

まあ、無理もない。本来ならばこんな場所へ連れ込まれた時点でおかしいと気付くべきだ。正直、野田久美子の方が警戒心がなさすぎた。

野田久美子は、クラスメイトが誘ってきたというだけでヒョイヒョイと僕についてきてあんな目に遭った。彼女の家庭は門限も厳しかったし、多分お嬢様育ちなところが少なからずあったのだろう。悪く言えば世間知らずだ。

でもそんなこと僕にはどうでもよかった。その世間知らずが幸いして、簡単に僕のオブジェに成り下がったのだから。

そして桃谷由紀。彼女は人並みには警戒心があるらしい。先ほどから倉庫内をキョロキョロと見回しては眉を潜めている。普段あんなに僕になついている彼女も、さすがにこれには怪しがっている様子だった。

野田久美子の石像にはあらかじめ大きな布をかけて、周囲のガラクタと一緒に置いておいた。だからそれには気付かれはしなかったが、この独特の雰囲気はかなり彼女を不安に陥れているようだった。けれど僕はまったくうろたえる気はなかった。桃谷由紀が僕の誘いに落ちた瞬間、すでに勝負は決まっていたのだから。

僕はカバンから木炭とスケッチブックをこれ見よがしに取り出すと、彼女にポーズをとるように言った。桃谷由紀はホッと安心の溜

息をついて笑った。実に単純だ。僕に「その気」がないとわかるとすぐに態度を翻し「え、どうやってポーズとったらいいですかね」と楽しそうに訊いてくる。

僕は言った。

「後ろを向いて、少し腰をひねってくれるかな。あ、服はもちろん着たままでいいよ」

桃谷由紀は僕の軽い冗談でもう一度クスリと笑うと「はい」と素直に返事をし、言われたとおりのポーズをとった。

なぜ僕がこのポーズを指示したかというと、理由は簡単だ。僕が背後から彼女にそつと近づくのに、気付かれないようにするためだ。「そのままじつとしてて」

僕はスケッチブックを開くと、木炭を紙の上で滑らし始めた。

シャツシャという音が、倉庫内に小さく反響する。その音を聞いてすつかり安心したのか、桃谷由紀は目を閉じて完全にモデル気分になっていた。

数分が経過した。僕は、音を立てないようにハタリとスケッチブックを閉じた。

「先輩、どうですか？」

桃谷由紀が目を閉じたまま訊いてくる。僕は「いい感じいい感じ。そのままね」とさもデッサンを続けているかのようにしゃべりながら、物音一つ立てずに立ち上がった。

彼女までの距離は、若干2メートル。容易な距離だった。

僕は気配を消して桃谷由紀のすぐ背後に立つと、フワリと彼女の首筋に両腕を回した。

「え？ せんぱ……」

ピシリ。

微かな変化の音と共に、桃谷由紀は瞬時に石像と化した。

ちよつとばかりやり方が強引だったかもしれない。気付かれて暴れられないよう強く石化の念を込めたためだ。ただしその代わり、彼女は苦しむ間もなく「あれ？」という表情のまま固まった。

僕のオブジェの2体目の完成だった。

倉庫の天窓から、薄っすらと日の光が差し込む。

2体の少女の石像は、まるでその光をスポットライトのように浴びて、各々が活動を停止した時間を切り取って佇んでいた。

6、笑う悪魔

土日を挟んだ月曜日、登校すると学校内は大変な騒ぎになっていた。2人目の失踪者が我が校から出たからだ。

2人目の両親もすでに警察への捜索願を提出しており、学校側は朝礼で注意を呼びかけたりして警備を強化した。警察も本腰を入れて動き出し、野田久美子と桃谷由紀といった我が校の女子生徒連続失踪事件は、まだほんの小さくだが、マスコミにも取り上げられるようになった。

ホームルームが終わり、担任の先生が一限目は自習をするようにと言って教室を出て行った。緊急の職員会議があるらしい。

先生が立ち去った後、再び教室内を今回の事件の話題によるザワつきがドツと襲った。

何の接点も無いたった2人の同校の生徒が失踪しただけで、こんなに大騒ぎになるのかと個人的には思ったが、しかしながら失踪させた本人がこの僕である以上、そういった疑問は胸の内にしまっておくことにした。

「なあなあ、今回消えた桃谷由紀って子、お前のクラブの後輩なんだろ？」

後ろの席の今宮が、シャープペンシルでつんつんと背中をつつきながら尋ねてきた。

「ああ、そつだよ。ビックリしたさ。こないだ部活にはちゃんと出ていたのに」

僕は顔色一つ変えずに返答した。

本来、普通の誘拐犯ならここで少なからずうろたえる場面かもしれない。例え顔色に出ていなくても、心の中はビックリと動くはずだ。だが僕はいつさいの動揺はなかった。平気で今宮たちの犯人当て推理の話題に乗ることができた。

「俺はさ、福島先生が怪しいと思うんだよな。あいつちょっとロリ

「コンの気があつたる？　いつもジロジロ女子生徒を変な目で見てさ
誰かが言った。」

「いや、俺は鶴橋先生かなって思うんだ」
今宮も腕を組んで発言した。

「根拠は？」

もう一人の誰かが尋ねると、今宮は「ない！」とキツパリと答えた。

「なんだそりゃ」

僕がわざとらしくツツコミを入れると、今宮は今度は僕の方を見て「お前は誰だと思う？」と訊いてきた。僕は飄々と答えた。

「うーん実はな、うちの美術部顧問の天満先生、怪しいと思うんだよ」

「なんで？」

「いや、こないだ桃谷のことジロジロ見てたし」

「あー、それありえるかも。あの人、以前セクハラ疑惑で教頭先生から冤罪ふっかけられてたしなあ」

僕はもう一度ツツコミを入れた。

「じゃあ今回も冤罪かもしれないじゃん」

「そうだな、ははは」

今宮を含め、笑う生徒たちがチラホラと見受けられる。どうやら、今回の失踪事件のことを何気に楽しんでいる奴らがいるようだ。

普段学校へ来て勉強や部活をして、同じような会話をするとという刺激のない生活を送っていると、こういった事件は彼らの日々のちよつとしたスパイスになるのかもしれない。その点、僕は思いがけない激辛のスパイスを手に入れることができたなと一人愉悦に浸っていた。

「十分注意して寄り道せず帰るように」

帰りのホームルームで厳重注意を受けて帰宅すると、妹の桜が玄関に飛んできて言った。

「ねえ今、ニユースでお兄ちゃんの学校のことやってたよ」

「お前はミーハーな奴だな。べつに僕が関係してるわけじゃないんだぞ」

僕は手を洗つてうがいをすると、リビングでついたままのテレビの顔を素知らぬ顔で通り過ぎ自室にこもった。

「くくく、くくくく……」

机につくと、自然と含み笑いが込みあげてきた。

「くくくく……くつはっははっ」

あまりにもおかしかった。

誰も僕を犯人だと疑っていない。野田久美子も桃谷由紀もこんな僕に僕の近くににいるのに、誰一人として微塵も怪しむ者などいなかった。

僕はこの能力を手に入れてから、やたらと周囲に気を配るようになった。それは、ただたんに僕の独占欲を満たしてくれる相手を選び出すためだけじゃなく、この能力自体を隠すためでもあった。しかしそれが功を奏して、現に僕は今こうして周りの人間や警察に勘付かれることなく、普通のイチ学生として過ごしている。

僕には自信があった。生活のあらゆることにおいてミスをすることがなくなった。それは最高の道楽を手に入れたことからくる順風満帆への変化であり、ストレスを感じさせない心の余裕だった。

僕はこの石化能力を与えてくれた神様に感謝してもしたりないほど胸が満たされていた。

その日、雨は朝から降り続いていた、

雨音が途切れることなく教室の中へと流れ込み、窓から見える景色を灰色に染めていた。

僕は授業が終わると、部活がない日ということ、いつもの倉庫へ向かった。

倉庫は古いバラック造りで、ところどころ天井に穴が開いている。雨漏りがして、僕のコレクションたちに被害が及んでいないか心配

だった。

いつものように、誰にも見られることなく校門を左に曲がった。傘である程度カモフラージュできていたからそれは容易だった。

閑静な住宅街を通り抜け、例の倉庫へと足早に歩を進める。住宅街を抜ける途中、警察の人間と一度すれ違ったが、彼らは僕をこの辺りにすむ人間だと思っただけらしい。声をかけられることなく、通り過ぎていった。

7、雨音

雨は次第に強さを増していった。僕はさらに足を速めて倉庫へと駆けた。

倉庫の入り口に着くと、周りは草木が多いせいか、湿った植物の匂いが鼻をついた。倉庫の外壁はすでに雨で完全に濡れていた。微かにポチャリポチャリと雨粒の滴り落ちる音が周囲から聞こえてくる。倉庫の中も、これでは水浸しだろうと心配した。

僕は傘を閉じひと振るいして水滴を飛ばすと、急いで倉庫の扉を開けた。案の定、中からも微かにだがコンクリートの地面に当たる雨漏りの音がしてくる。

何かが、薄暗い倉庫の奥で動くのがわかった。思わず中へ入ろうとした足が止まる。

じっと目を凝らすと、僕はやがてそれが人だということに気が付いた。

全身を、ゾクリと冷たいものが走った。

ゴクンと唾を飲み込む。僕のコレクションが第三者に見つかった可能性が高い。

「だ、誰だ……？」

僕は震える声で倉庫の奥の人物に尋ねかけた。そしてそうしながらも、目を細めてそれが誰なのかをはっきり見極めようとした。

再び、全身を冷たい波が走り抜けた。今度のは、とてつもない感触だった。脂汗が一気に額に吹き出た。

倉庫の奥の人物が、弱々しい声で呟く。

「お、お兄ちゃん……？」

「……桜」

僕は、ついに自分が石にされたような感覚に陥った。体中の筋肉が強張り、動けなくなった。

僕のコレクションたちの横に、妹の桜が怯えた目をして立っ

た。

「お兄ちゃん、これ……」

桜の声はまるでか弱い子羊のように震えていた。僕は固まったまま、彼女に言った。

「桜……どうしてここに……」

桜は何も答えず、僕と石像を何度も交互に見つめ返していた。

しんとした空気が、倉庫の中を包み込んだ。ただ、雨がバラック屋根へバタバタと当たる音だけが、やけに反響して聞こえてくる。時間がまるでドロリとした油のようにゆっくりと過ぎていった。

「ねえ」

桜が静かに口を開いた。

「この石像って、今行方不明のお兄ちゃんの学校の生徒さんたちのだよ……？ どうしてこんなものがここにあるの？」

僕の唇は震えて、言葉は出なかった。

「なんでお兄ちゃん、ここに来たの……？」

桜のか弱い目が、僕をじっと見つめ続ける。僕は目を逸らすことができなかった。

「なんで……お兄ちゃん、ここに……？」

彼女の途切れ途切れの声が、一欠片ずつ、僕の耳に入り込んで消えていった。

僕はやっとの思いで、返す言葉を口にした。

「いや、ちよっと雨宿りを」

「嘘……」

桜の一言が僕の言い訳を一蹴した。

「私、お兄ちゃんがここに現れるまで、そんなことあるはずがないって思ってた……」

彼女の二つ二つの言の葉が僕の胸に突き刺さる。

「そんな現象、あるわけがないって……」

額の汗が、ゆっくりと頬を伝い、地面へ滴り落ちた。

「でも、あの人が言った通り、お兄ちゃんは私の目の前に現れちゃ

った」

桜のこわばる口調が、一つの疑問と共に僕の心臓を貫いた。

「あの人……って……？」

彼女はおもむろに答えた。

「今宮くん……」

僕は、そんなことあるはずがないと頭の中で自分に言い聞かせた。誰にも見つからない絶対の自信があったからだ。だが、桜の語る真実は残酷だった。

「今宮くん、見ちゃったんだって……。お兄ちゃんが、この……桃谷さんって人を、石に変えちゃうところを」

僕の中で、何かが音を立てて崩れた。

重苦しい空気が流れる。雨は強さを増す一方だった。

「見ちゃったって、どういうことだよ？」

僕は、とつさに知らぬふりを決め込んだ。

「石に変えちゃうって何？ テレビかなんかの話か？」

もうこの時点で僕は、自分の嘘がガラスより薄っぺらく脆いものだということにはわかっていた。

それでも自然と足が前に出た。

「なあ桜、意味わからないこと言ってるんで帰ろう。風邪ひいちゃう」

「近寄らないで！」

桜が大声で叫んだ。

「もういいよお兄ちゃん、もう全部わかってちゃってるんだよ……。今宮くんが言った。『信用できないなら、兄貴の部屋を探ってみればいい』って。そしたらこれ……」

桜は、足元の鞆からガサガサと何かをいくつか取り出した。

それは、ゴツゴツした石のオブジェで、かつて僕の部屋でペンや時計と呼ばれて使われていたものだった。

「これ、何なの？ 石、だよ？」

「……っ！」

突きつけられた現実はあまりにも逃げ道が無く残酷なものだった。
「嫌だよ、お兄ちゃんが犯人だなんて……」

僕は、ドクドクと波打つ心臓を必死で押さえようと試みながら、桜に近づいていった。一歩進むごとに、彼女もおぼつかない足どりで一歩退がる。

「まさかお兄ちゃんがこんな信じられない超能力を身につけてるなんて……」

僕はまた一歩近づき、桜もまた一歩退がる。

「もう嫌だよ私、お兄ちゃんがこんな」

「ごめん、桜！」

僕は、自分でも思いがけない行動に出ていた。

「きゃっ」

桜の悲鳴があがる。僕は、桜に飛びかかり、ギュッと彼女の体を抱きしめていた。

「お、お兄ちゃ……あっ、ああ……っ」

桜の体が、パリパリと硬くなっっていく音を立てた。

8、崩落

僕と今宮新あらたは幼稚園時代からの幼馴染みだった。そこに妹の桜も加えて、よく昔から3人で遊んだ。桜は、今宮のことを僕と同じくらい慕っていて「お兄ちゃんが2人いるみたい」と、いつも僕らの後を追いかけていた。

今宮が、僕が少女連続失踪事件の犯人だと知ったとき、つまり、僕が超能力で人間を石に変えていると知ったとき、彼はどんな気持ちだったのだろう。こんなに親しかった桜に、これほど残酷な事実を打ち明ける。それが僕たち3人の関係に亀裂を入れることは容易に想像できたはずだった。

「い、いやああっ！」

桜が僕の腕の中でもがき始める。それでも僕は彼女を離そうとはしなかった。

いや、できなかった。

「ごめん……ごめん、桜……！」

ただただそう呟きながら、僕は着実に桜の体を石に変えていった。ふと、僕の頬に水滴のようなものが流れていくのを感じた。それは生暖かく、その正体が自分の目から溢れ出るものと気付くまでに、そう時間はかからなかった。

「お……お兄ちゃ……」

桜の手や足が、完全に硬くなっていく。変化は留まることなく、彼女の頬にまで及んだ。

「目を……覚……まし……て……」

桜はそう最後に言い残し、やがて、完全な石となった。

僕は、そつと彼女の体から抱き締めていた腕を離すと、ヘタリとその場へ崩れ落ちた。

僕の唇はガタガタと振るえ、何かを言いかけたが声が出なかった。

石像となった桜の目じりには、うつすらと涙の跡が残っている。それを見た途端、僕は大声を張り上げて、泣き叫んでいた。

ぎゅっとたるまのようにつずくまり、地面に何度も何度も頭を叩きつけた。鼻水が垂れ下がっても気にならなかった。僕の惨めな鳴咽だけが、倉庫の中に響き渡っていた。

「まさか実の妹の桜ちゃんまでも石に変えちまうとはな」

突然、入り口の方から声がした。

僕がくしゃくしゃの顔で振り返ると、コツコツとこちらに近づいてくる一つの影があった。

薄暗い倉庫の中、バラックの屋根から水滴と共に漏れる小さな光が、その影の顔を映し出した。

「い、今宮……」

それは、紛れもない僕の親友の姿だった。

「石動……酷い顔だな」

今宮はポケットに手を突っ込んだまま僕の前で立ち止まり、泣き崩れている僕を、まるで醜い獣を見るような目で見下ろした。

「お前……なん」

「なんでここにいてるか？ 真相を見るためだよ」

「尋ねようとした僕の言葉を遮って今宮は言った。」

「真相……とはまた違うか。お前がどういう行動をとるのか、それを確かめたかったんだ」

「どういう行動って……」

僕は鼻水をすすり上げた。涙はまだ止まらない。

「近親の者に秘密を知られてしまっても、能力を使わずにいられるか……。情けないことに、答えはNOだったようだがな」

「そこまで聞いて僕はハツとした。今宮は、僕を試したのだ。」

あえて桜に真実を話して、証拠まで探り出させて僕を追い詰めさせる。それを遠くからそつと眺めている。

幼馴染みの桜が犠牲になってもおかまいなしにだ。

それがわかったとき、僕は歯を食いしばり今宮の首に右手を伸ば

していた。怒りが僕を混乱させた。彼の首を掴みかかる。

「熱ッ!？」

直後、僕は思わず触れた手を離していた。

「なんだ、これ……」

僕は自分の手の平と彼の首筋を交互に見つめた。今宮の体温が尋常じゃないほど超高温だったのだ。

「びっくりしたか？」

今宮は依然突っ立ったまま、呆気にとられている僕を睨んでいた。

「お前……なんだよその体温……」

僕が尋ねると、彼は少し口元を歪ませて答えた。

「実は俺も超能力者なんだよ」

一瞬、耳を疑った。え？ と目が丸くなる。

「生まれつきだったんだ。……俺は自分の体温を自在に調節できる。それも半端な温度じゃない。絶対零度から1万度まで自在にだ」

なんだよ、それ。僕の口から自然とそういった言葉が漏れていた。今宮は、僕の胸倉を掴んで無理矢理立ち上がらせると、一発、強烈なパンチを僕の頬におみまいした。僕は数メートルは吹っ飛ばされたと思う。

「お前に超能力が発現したってのは驚いたが、それよりもっと驚いたのはその使い方だ。最低だな、お前」

彼は、鼻血を垂らしながら怯える子犬のような目をした僕を睨みつけた。

「超能力は、ふと何千万分の1くらいの確率で人間に現れる超常の力だ。そんなもの、おいそれと自分の愉悦のためだけに使っていないわけがない」

今宮は、3体の石像に目を向けるとその方向へ歩いていった。

「俺はお前に復讐しにきたんだ。これだけはどうしても許せなかつた。……お前が石に変えた野田久美子。彼女は、俺の恋人だった」
「なっ!？」

僕の声はそれを最後に、喉の奥で完全につつかえた。

初耳だった。クラスのアイドルでもある野田久美子と、今宮が付き合っていたことなど知る由もなかった。

今宮は、呆然とする僕を尻目に、野田久美子の石像のところまでくると彼女の頬に軽くキスをした。その顔は、この上なく悲しみと悔しさに満ちていた。

「待つてる久美子。今からお前の無念、晴らしてやる」

9、エピソード

今宮は、今では冷たくなった野田久美子の肌を、惜しむようにひと撫ですると、こちらに向き直って言った。

「さあ、物理から熱伝導の問題だ。あつあつに熱した石を急激に冷ますとどうなるでしょうか」

僕は最初、彼が何を言わんとしているのかいまいち理解できなかった。ただ、彼の目が異常に残酷な表情を見せていたのが気になった。そしてそれは、次に彼がとった行動ですぐに悪い直感へと変わった。

今宮は桃谷由紀の石像に手の平を触れると、唇を噛み締めて、意識を集中させ始めた。

直感は、的中した。

僕が「やめろ」と叫ぶよりも寸分早く、桃谷由紀の石像がバリンと大きな音を立てて砕けた。

慌てて止めに入ろうとした僕の手は宙を泳ぎ、その向こうで桃谷由紀は幾千の石つぶてとなって崩れ落ちていった。

「うわああああっ!!」

僕は、獣のような悲鳴を張り上げた。これでどんな奇跡が起ころうとも、桃谷由紀が元に戻ることはない。ましてやオブジェとしてはガラクタ同然だ。

気が付くと、僕は今宮に対し、渾身の拳を振りかぶっていた。

硬いものが骨に当たる鈍い音がした。僕の左頬に痛みが走る。殴り飛ばされていたのはまたもや僕だった。

「大人しく見ている。そして痛感しろ。一番大切なものを理不尽に奪われた悲しみを」

次に彼がとる行動は瞬時にわかった。

彼は、僕の妹、石になってしまった桜の額に手を当てた。

「やめろおおおおっ!!」

もう我を忘れていた。無我夢中で、起き上がった。走った。僕の妹だけは絶対に壊させない。今宮を殺す覚悟で襲い掛かった。

「やめる今み」

そこで、僕の意識はろうそくの炎のようにフツと消えた。

「悪いな。嵌めるようなマネしちまって……」

そう言うと今宮は、カチコチに凍結させた僕の体から手を離し、桜の石像の方へ再度向き直った。ゆっくりと彼女の頬を、両の手の平で優しく包み込む。

「安心しろ、桜ちゃん。君も君のお兄さんも壊しやしないよ。ここで2人仲良く、久美子と……それに壊しちまった桃谷由紀のこと、見守ってやってくれ」

最後に彼は自分の手を見つめ、こう呟いた。

「残酷な話だよな。人より特出したものを手に入れると、途端にそれは凶器に変わる」

今宮はコツコツと倉庫の出口に向かい、地獄に墮ちた者のような目を伏せ、扉を閉めた。

冷たい雨が降りしきる中、彼の足音は悲しげに消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8335q/>

石化魔

2011年2月14日09時55分発行